

秋田市大森山動物園情報誌

コミュニケーション

COMMUNICATION No.77

2009.3月号

特集

イヌワシ飼育 40年の歴史

イベントレポート

雪の動物園

園長のあいさつ／ニューフェイス紹介／動物病院から
動物情報／飼育レポート／飼育日誌から

かたばた通信 イベント紹介・お知らせ



秋田市大森山動物園 ミルヴェ



表紙の写真：ニホンリス

日本の固有種であり、本州・四国・九州に分布し、低山帯を中心とした森林に生息しています。昼行性(昼間に活動する)で、特に朝方に活動的になります。主に樹上で生活し、植物の種子や果実、キノコ、昆虫などを食べます。秋にはドングリなどを地中に埋めたり、樹上に隠しておき、冬になって食べ物が少なくなると、掘り出して食べる習性があります。季節によって、夏毛と冬毛になります。春から秋にかけて3~6頭の子を出産し、メスが子育てをします。

当園では、平成20年10月、繁殖を目的として、新しい個体(オス1頭、メス1頭)を井の頭自然文化園より導入しました。赤ちゃん誕生が期待されます。



03 園長のあいさつ
2009年の大森山動物園「風を感じて」

04 ニューフェイスの紹介

05 動物病院から

05 こんにちは さようなら 動物情報

06 特集

イヌワシ飼育 40年の歴史

08 飼育レポート / 飼育日誌から
キリン / ホシガメ

10 イベントレポート

雪の動物園

12 かたばた通信

飼育動物数 平成20年12月末現在

類	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	魚類	合計
種数	53	48	11	2	4	118
点数	288	182	30	8	15	523



2009年の大森山動物園 風を感じて

秋田市大森山動物園園長 小松守

長い冬が明け、北国秋田のお日様にも力強さが戻り、春の風に心地よさを感じます。人も動物も活気を帯び、動物園のあたりには、開園を待つ子どもらの声が響いています。

2009年のシーズン、大森山動物園ミルヴェは引き続き「動物と語らう森」をテーマに活動していきます。

今シーズン特に力を入れたのは、イヌワシとフクロウによって、2つの風を感じてもらう取り組みです。この取り組みを実現すべく、現在、飼育員と動物が一体となってトレーニングに励んでいます。

展示場でネット越しに見るのとは違い、イヌワシが力強く羽ばたく様子を目の前にすると、イヌワシの風と生きる力が感じられます。フクロウが静かに飛ぶ姿とその柔らかな風には、フクロウらしい軽やかでエレガントな命を感じることができると思います。

もちろん、こればかりではありません。来園者の皆さんが少しでも動物との語らいができるよう、いろいろな角度からその橋渡しをしたと考えています。

その一環として、この春、草食動物のゾーン内に財団法人日本宝くじ協会から寄贈を受ける新しい施設「(仮称)宝くじ遊園(大型遊具)」が完成します。昨年の暮れから工事が始まっており、4月にお披露目が予定されています。

遊園(遊具)といっても、単なる遊びのアイテムではありません。いろいろな角度、視点からワピチやトナカイ、マーコールなどの草食動物をご覧いただけるように工夫が凝らされており、見学通路や施設としての機能も兼ねています。動物との新たな出会いを演出するとともに、楽しみながら動物のことが学べる施設です。「宝くじ遊園」の真ん中にひときわ高くそびえ立つ「たいようの塔」からは、新しい景色の発見と新しい風を感じることもできるでしょう。

また、5月には社団法人日本動物園水族館協会の総会が秋田市で開催され、大森山動物園がそのホスト園を務めることが既に決定しています。例年以上に忙しくなりそうですが、全国の動物園・水族館の関係者が集まるこの好機に、いろいろな助言をいただきながら、秋田の動物園を全国に発信する機会にもしたいと考えています。

さらに、大森山動物園を未来に向けてつなげるためにも、様々な機会に市民の皆様と意見を交わすシーズンにもしたいとも考えています。

動物園スタッフ一同、新しいシーズンもご来園の皆様を笑顔でお出迎えいたします。

今シーズンもご愛顧、ご支援を宜しくお願い申し上げます。



昨年3月に生まれ、人工育雛に取り組んでいるニホンイヌワシの「風(ふう)」



ピクニック広場でフライト・トレーニングに励むホンドフクロウのフクジロウ



【上】順調に工事が進む「(仮称)宝くじ遊園」一番高い施設が「たいようの塔」

【左】「(仮称)宝くじ遊園」の完成予想図 ※施設名や動物展示は一部計画と異なります。



シセンレッサーパンダのユウタ



ジュン(手前)とリンリン

アミメキリンのリンリン

大森山動物園のニューフェイスを紹介します



アカカンガルーのオールスターキャスト。中央左がデニーロ

ナナ(上)とユウタ



アカカンガルーのデニーロ

昨年の秋、大森山動物園に仲間入りした動物たちをご紹介します。

まず、千葉市動物公園から導入したのは、オスのシセンレッサーパンダ「ユウタ(2)」。立ち上がることで有名な「風太」の子どもです。人なつこく、食いしん坊。親譲りの立ち姿もきれいです。当園のナナとの間に元気な赤ちゃんの誕生が期待されます。

盛岡市動物公園からはアミメキリンを導入しました。当園のオス、ジュン(15)のお嫁さんで、愛称は「リンリン(3)」です。来園当初は柵で仕切って、ジュンとは別々のスペースで過ごしていましたが、最近では、天気の良い日には仲良く奥の展示場で過ごすこともあります。春には、2頭の仲睦まじい様子をご覧いただけることと思います。(P8にリンリンに関する「飼育レポート」を掲載しています) 東武動物公園から導入したのはオスのアカカンガルー。「デニーロ」という愛称で、5歳です。来園当初は担当者を威嚇するなど、気性の荒さが目立ちましたが、当園のメス3頭に囲まれた穏やかな生活で、最近はずっかり落ち着いた様子。この調子なら、二世誕生は案外近いかもしれません。

このほか、井の頭自然文化園からニホンリスのつがいも導入しました。



ニホンリスのつがい(左がオス、右がメス)



森のびょういんの一年

獣医師 高橋 拓



森のびょういんでの治療

平成20年4月に森のびょういんが稼働してから一年が経とうとしています。

この間の活動実績は、診療件数216件、入院件数64件(うち退院件数46件、死亡件数17件)、手術件数26件、レントゲンの撮影件数60件でした(2008年12月末現在)。

新しい病院ができ、診察業務の幅はかなり広がりましたが、野生動物の病気やケガは、並大抵の努力では完治しません。たとえ手術治療が上手くいったとしても、術後管理がとても大変なのです。術後のストレスで死亡してしまう動物、治療を続けることでさらに

病状を悪化する動物など、人の手が加わることは野生動物にとってストレス以外の何物でもありません。

治療器具や診断装置が進歩しても、重要なのはその動物のころころを読むことです。なるべく動物の体力を奪わない治療を心がけ、その動物が生きるために必要最少限の治療、すなわち生きる力を伸ばす治療をしなくてはなりません。判断をあやまると、すぐに死んでしまいます。そのためには、私たち獣医師も日々勉強し、飼育員と協力しながら動物と向き合い、最善を尽くし、努力し続けなくてはいけません。

まだまだ新米獣医ですが、動物のころころを読む獣医になりたいと日々思っています。



屋外での処置の様子

こんにちは さようなら 動物情報

出生

10月16日生まれ

アフリカタテガミヤマアラシ



10月16日、メス「ワヤ」が赤ちゃんを出産しました。春には一般公開ができる予定です。お楽しみに。

搬出

10月6日、群馬サファリパークへ

ワピチ



施設の改修にともない、ワピチ2頭(いずれもオス)を群馬サファリパークに搬出しました。

搬出

12月26日、日立市かみね動物園へ

シセンレッサーパンダ



レッサーパンダのメス「麻麻(2005年7月7日生)」は、繁殖目的のため茨城県の日立市かみね動物園にお嫁りました。

搬出

10月6日、岩手サファリパークへ

ムフロン



施設の改修にともない、ムフロン全頭(オス4頭、メス1頭)を搬出しました。これにより、本園でのムフロン展示は終了となりました。

訃報 | コモンマーモセット 9月8日



妊娠中だったマーモセットファミリーの母親が死亡しました。逆子で難産となったため、体力を消耗したことが原因と思われます。

訃報 | カピバラ「たくみ」 11月11日



カピバラの「たくみ」が、ケガによる外傷等のショックによる衰弱のため、死亡しました。7歳でした。

イヌワシ飼育 40年の歴史

園長 小松 守 飼育展示担当 佐々木 祐紀

希少な猛禽イヌワシの飼育が秋田で始まったのは1970年。秋田と山形の県境に位置する鳥海山で生まれたヒナ2羽、オス「鳥海」とメス「白滝」を保護してからでした。当時はまだ大森山動物園(1973年開園)ができておらず、千秋公園児童動物園時代のことでした。「白滝」は死んでしまいましたが、「鳥海」は今も元気で現在39才となり、国内飼育の最高齢と思われます。秋田のイヌワシ飼育歴は、「鳥海」の年齢と重なり、長いものになりました。その後、大森山動物園では繁殖にも成功し、現在の飼育数は10羽にまで増えました。また、各地の動物園に増えたヒナを送るなど、展示にとどまらず、繁殖技術の確立や種保存(生息域外保全)にも努め、東京の多摩動物公園とともに、国内での繁殖基地的役割を果たしています。また、大森山動物園は、(社)日本動物園水族館協会・種保存委員会のイヌワシ繁殖計画をコーディネートする種別調整園にも指名されています。約40年のイヌワシ飼育を振り返りつつ、今後を展望してみたいと思います。

はじまりの時代

イヌワシの飼育が始まったころは、飼育データもなく、生態がよくわかっていなかったばかりか、種保存という言葉さえ動物園関係者には一般的ではありませんでした。森の王者と呼ばれるイヌワシの飼育ケージも20㎡程度と、貧弱なものでした。しかし、1982年、「白滝」が産卵したことで、イヌワシの繁殖への思いが湧き上がりました。

繁殖への挑戦の時代

当時、飼育下でのイヌワシの産卵は珍しいものでした。しかし、飼育舎が狭く、保護された2羽は人の手で育てられたためか、うまく交尾できませんでした。文献調査、地元のイヌワシ研究者などの情報交換、秋田大学との共同研究で繁殖行動と鳴き声との関連性の調査なども行った後、人工授精への挑戦となりました。1988年からこの挑戦はスタートしたのですが、「白滝」の死亡



当園で初めて飼育した「白滝」と「鳥海」(旧イヌワシ舎にて)

(1989年)により中断が余儀なくされました。その後、新たなメス「たつ子」(1988年旧田沢湖町で保護)が導入され、人工授精も粘り強く続けられ、1998年ついに有精卵を取ることに成功、胚の発育も確認できました。ふ化こそできなかったものの、日本初の人工授精での繁殖に、大いに期待が高まりました。しかし一方では、人工授精はタイミングの見極めが難しいうえ、イヌワシへのストレス、術者への負担など大きなリスクも背負っていました。こうしたなか、交尾が期待できそうな新オスの導入が決まり、繁殖作戦は人工授精から自然交配へと舵が切られました。新潟産イヌワシを両親にもつ多摩動物公園生まれのオス「信濃」と、秋田の旧田沢湖町産のメス「たつ子」という、共にルーツを雪国に持つ新ペアが2000年につくられました。

こうした繁殖作戦のベースには、1989年の新イヌワシ舎の建設があったことも忘れてはなりません。少しでも広い空間で、気高いイヌワシが秋田らしい環境で暮らす様子を見てもらいとの思いもあり、秋田の森を象徴するブナの木が植えられた、高さ約10m、広さ約100㎡のケージがつけられました。

初めてのヒナ誕生

2003年、「信濃」と「たつ子」の間に、待望のヒナ1羽が誕生しました。しかし、初めての繁殖であり、親鳥がヒナを抱けるのか、餌をあげられるのかとの不安は大きく、無事成長することを祈りながら、些細な変化も見逃さないよう、慎重なモニター観察

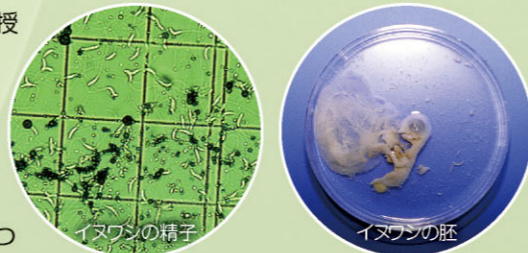


ふ化して14日目の「空」

が続けられました。不安は杞憂に終わり、「たつ子」は初めてのヒナを見事に育てあげました。イヌワシの未来に明るい光をもたらした記念すべき大森山動物園最初のヒナに、市民は「空」と名付けました。

失敗から生み出された逆転の発想

「信濃」と「たつ子」のペアは、2005年にも2個産卵、うまく2個ともふ化しました。嬉しい反面、気がかりなことがありました。イヌワシは、繁殖習性のためか、巢内のヒナ同士に争いが起き、早くふ化したヒナが、後からふ化したヒナを攻撃し、突き殺すことが多いのです。餌不足が闘争を誘引するとの見方もあり、ヒナには十分な餌が与えられました。しかし、攻撃を避けることはできませんでした。攻撃を受け瀕死の重傷を負ったヒナは、保護され人の手で育てられることになりました。その後、すっかり元気を回復し成育したヒナは、兄ヒナのいる巣に戻されました。親鳥は、戻された弟ヒナに何度も餌を与えようとしたのですが、弟ヒナは受け付けませんでした。兄ヒナも弟ヒナを攻撃することはなくなっていたのですが、結局弟ヒナは、兄も、親さえも怖がったためか、餌をとれず死亡してしまいました。親との絆を紡ぐ大切な時期に人に育てられた弊害だったのでしょか。痛ましい出来事でした。2006年、今度は3つの卵が生まれ、3つともふ化しました。前回の辛い経験をもとに、全てのヒナが親元で育つ方法を検討しました。攻撃され、弱ったヒナを巣から取り上げるのではなく、攻撃する強いヒナを取り上げ、その間に弱いヒナに十分に親子の絆を結んでもらおうという作戦をとりました。ふ化後約1ヶ月でヒナ同士の闘争がなくなることも経験上わかっていたので、それまでの辛抱です。闘争しないように巢内に1羽だけを残し、残りの2羽は一時的に、人に慣れないようにしつつ、人が育てました。また、人の姿をヒナに見せないように、親鳥の頭部に似せた模型を使って餌を与え、巢内の音もリアルタイムで聞かせるなどの工夫も凝らしました。数日間を目安に、順番に巢内のヒナと入れ替えて行く、秋田独自の「ローテーション育雛方式」を実践しました。(詳細は右記参照)約1ヶ月後、巣では3羽のヒナが、お互い争うことなく親鳥から餌をもらう様子が観察できました。画期的な方法が確立したのです。



イヌワシの精子

イヌワシの胚



新イヌワシ舎



模型を使って給餌の様子



無事育ったヒナ

繁殖基地づくり拡大のために

2003年からの繁殖で、9羽のヒナが無事に成長しました。繁殖した個体は、繁殖基地の拡大を託され、盛岡や石川などの動物園に旅立っていきました。多くの人々にイヌワシという動物を見てもらうために、また、より多くの飼育データ蓄積のために、そして何よりもイヌワシ自身の命をつなぐという大事な仕事を担ってもらうために、イヌワシの繁殖基地が増え、各地でイヌワシが増えることで、イヌワシの生息域外での保全がより強固なものになるでしょう。将来的には、野生イヌワシ保護の手助けにも結びつくかもしれません。

イヌワシという動物との語らいを求めて

2008年、イヌワシのヒナを人の手で育てるという新たな挑戦が始まりました。動物園のイヌワシは、網越しで、いつも遠くの止まり木にいるため、近くで見ることができません。「もっと間近で見たい」「大きさや力強さを実感してほしい」、そんな思いを実現するために、これまで未経験の分野への挑戦が始まりました。ヒナを人の手で育て、人に馴らすのです。大森山では前例のない試みであり、担当者の辛抱強く、緻密な訓練、そして豊かなイヌワシ飼育経験が不可欠です。現在、イヌワシを腕に乗せ園内を周り、他の動物や環境に馴らすための訓練が続けられています。イヌワシが目前で羽ばたく時、あの力強い風を感じたとき、大人も子供もイヌワシの生きる力を感じてくれることでしょう。大森山動物園は、こうした何かを伝えることにもこだわり続けたいと考えています。イヌワシも、大森山動物園も存在意義を失わないためにも。



飼育員の腕に乗るイヌワシ



1 リンリンのお嫁入り

飼育展示担当 佐藤 光

昨年の11月12日、盛岡市動物公園からアミメキリンのリンリン(メス3才)が大森山動物園にやってきました。

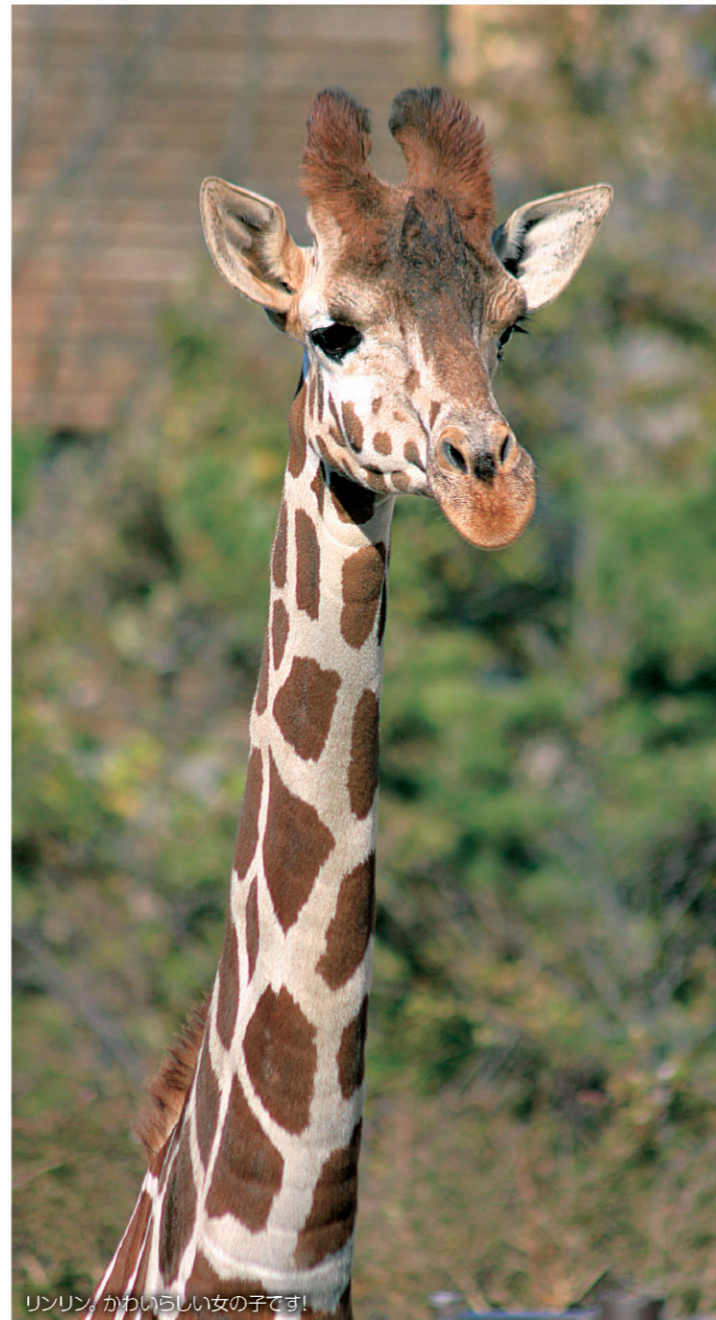
その日のリンリンは、長い時間の輸送がストレスとなったのか、目つきが鋭く、頬や目の上にはシワができ、ヨダレまで垂らしていました。また、輸送箱への出入りや輸送途中に激しく暴れたため、ケガを負っている心配もありました。

しかし寝部屋に入ると、顔つきは変わらないものの、少しではありますがリンゴや乾草を食べるなどして、だいぶ落ち着いていました。また、心配していたケガもありませんでした。そして日が経つにつれ、若い雌らしいものとの優しい顔に戻り、餌も良く食べるようになりました。

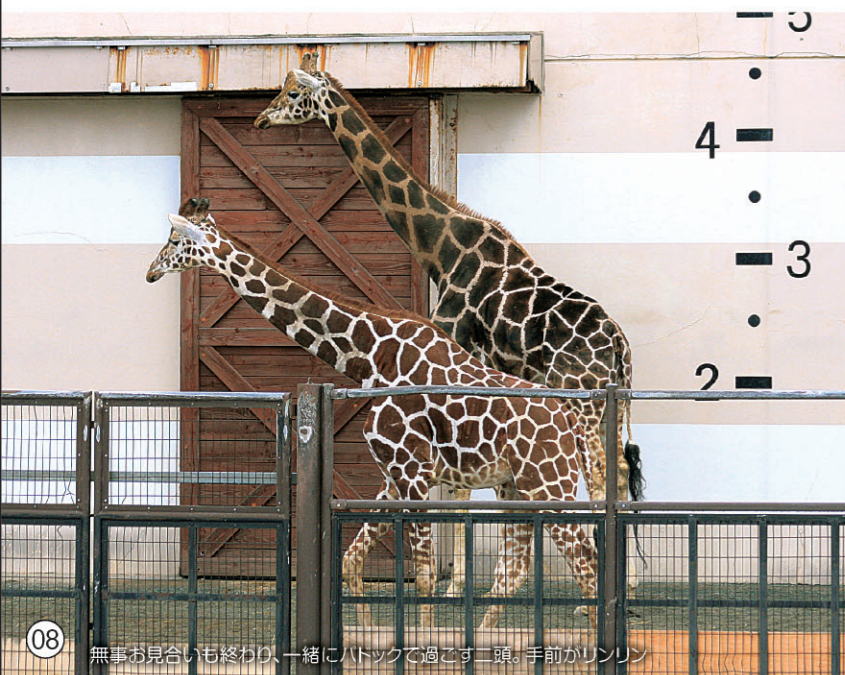
リンリンは、人や車の動き、物音にも敏感に反応して、耳をピクッと動かし、ときには驚いて飛び跳ねるような動きをすることもあります。

また、ジュン(オス15才)の姿が見えているときは、素知らぬ顔をして普通にしていますが、見えなくなった途端、不安そうな顔をして、尋常ではないほどに走り回ります。見ているこちらがケガをしないかと不安になるほどです。

来園した当初は、活発で人馴れもしていて、元気な個体だと思っていましたが、本当は人一倍、いや、キリン一倍臆病で神経質であることがわかってきました。まだまだ心配ごとは尽きませんが、暖かくなる頃には新しい環境にも馴れて、間近でご覧いただけたいと思います。みなさんに愛されることはもちろんですが、ジュンとの間の赤ちゃん誕生にも期待したいところです。



リンリン、かわいらしい女の子です!



リンリン 搬入時の様子



搬入日に無事、室内に搬入されたリンリン



柵越しにジュン(左)とお見合い



走り回るリンリン

2 ホシガメの赤ちゃん誕生

飼育展示担当 佐藤 由香利

大森山動物園で飼育しているホシガメは、これまでも産卵することはありませんでしたが、どれも無精卵であったため孵化することはありませんでした。しかし、昨年の9月に産卵したものは有精卵らしく、今度こそ赤ちゃん誕生と期待に胸がふくらみました。

カメの孵化日数は温度や環境に大きく左右されるうえ、90日から180日と長い日数がかかります。その間はライトで保温するとともに、湿度が下がらないように気をつけながら、毎日様子を見守りました。

12月に入り、朝いつものように卵を覗くと、殻が破れているではありませんか!! 割れ目から小さな脚が見えたときには、「ついに産まれた!」と大喜びしました。そして、その1時間後には両前脚と頭が見え始め、全身が出てきたのは発見してからおよそ6時間後でした。その後、更に2個の卵が孵化し、全部で3匹の仔ガメが誕生しました。

仔ガメの大きさは3.6cmとピンポン玉くらいで、体重は15.5gととても小さいのですが、しっかりとカメの姿をしています。お腹にはまだ卵黄嚢(栄養が詰まった袋のようなもの)がついており、これが完全に吸収されるまでは何も食べずに過ごします。1週間後には卵黄嚢も消え、成長した個体と同様に野菜や果物などを食べるようになりました。

今はまだ保育器の中で飼育をしていますが、みなさんにお見せできる日も近いと思います。その時は、可愛い仔ガメ達の姿をどうぞ見てあげてください。



元気にエサを食べています



ふ化する時の様子



生まれた時は体長3.6cm



お腹についている黄色い塊が卵黄嚢

飼育日誌から

(H20年9月~H21年1月)

飼育職員が日々記録している飼育日誌の一部を抜粋してご紹介します。

- 9月 5日 ● ビーバー お見合いを続けていたが、モリコ(♀)と仔とマリオ(♂)を同居。全頭落ち着いている。
- 9月 7日 ● コモンマーモセット母 展示場でうすくまる。妊娠中で1匹逆子で死産。保育器にて保温。抗生剤等を処置。
- 9月 8日 ● コモンマーモセット母 難産。1匹お腹に入っているが、分娩困難。助産処置を試みるが、呼吸停止。蘇生処置するも死亡。
- 9月 14日 ● ヘンギン 室内集4ヒナ フールにて初めて泳ぐ。
- 10月 18日 ● レッサバパンダ(♂1頭)を千葉市動物公園、ニホンリス(♂1頭、♀1頭)を井の頭自然文化園、アカカンガルー(♂1頭)を東武動物公園より搬入。
- 10月 19日 ● カンガルー デニーロ(♂10/18搬入個体)終日落ちついていない様子。リンゴ・甘藷を食している。
- 10月 21日 ● レッサバ ユウタ(♂)新規参入個体 病院で検疫中。前日分の餌完食。笹も1/2本完食。終日落ち着いている。
- 11月 4日 ● カビバラ 部屋間のシュートの結合部が破壊され、全頭が一緒になり闘争。たくみ(♂)が全身にスリ傷、噛み傷があり右前肢付近がひどい。吹き矢により抗生剤投与。
- 11月 5日 ● エミュー ミー タ方収容時、カミナリの音におどろいたのか、展示場を走り回り収容に時間がかかる。
● カビバラ たくみ(♂)昨日の闘争のケガの治療のため麻酔後治療およびレントゲン撮影。
- 11月 6日 ● カンガルー ♀♀室内で同居する。デニーロ(♂)とモモコ(♀)の交尾を確認する。特にトラブルなし。
- 11月 11日 ● カビバラ たくみ(♂)術後初めてうみ(♀)と共に外へ。お互いいつもの定位置で横になる。PM2:20自力で立てなく意識朦朧となる。すぐに寝室へ運び温めるものの、PM3:00前死亡。外傷・打撲等のショックによる衰弱死と思われる。

- 11月 12日 ● リス 新規搬入個体(♂と♀)検疫終了のために、2頭ともリス舎へ移動。移動後は、2頭とも舎内をくまなく動き回り、さっそく糞材集め。貯食行動が見られ、興奮した様子もなく、採食も良好であった。
- 11月 12日 ● キリン リンリン(♀)盛岡市動物公園より搬入。収容後の方が落ち着いた感じだが、ソワソワする草あり。
- 11月 14日 ● キリン PM1:20ジュン(♂)展示場、リンリン(♀)パドックに出す。そのときジュンが外に出ると室内でリンリンが走り回る。収容しようとする警戒し入らず。餌で誘導すると入る。少し落ち着く。ジュンとの相性はよさそう。
- 11月 18日 ● レッサバパンダ ユウタ(♂)初めて屋外へ。展示場を念入りに臭いをかきマーキング。少し慣れてくると笹を食べたり休憩する。PM2:00頃雨がひどくなってきたので納舎。
- 11月 23日 ● カンガルー ♀を屋外展示場に出そうとしたが、モモコ(♀)がデニーロ(♂)から離れず、トマコとアンズを屋外へ。モモコとデニーロは室内展示。餌食い良好。
- 11月 24日 ● キリン AM10:00~PM3:00までパドック。ジュンが一度フレーメン(臭いに反応して唇を引き上げる生理現象)するが、リンリンへの追尾なし。落ちついて過ごす。リンリンはだいぶ慣れたようだ。
- 11月 27日 ● ユキヒョウ ライサ(♀)動き良い。入室後すぐに馬肉を食す。
- 12月 2日 ● ホンドフクロウ フクジロウ(♂)ヒクニック広場で調教訓練を開始。
- 12月 8日 ● リス 新個体(♀)餌置き場の上に糞を作っていた。元々あった巣箱は、クルミなどの食糧が大量に入っており、貯食のために使用している様子。
- 12月 11日 ● イヌワシ 08年生まれ第2ヒナ捕獲し採血。トローバン(個体識別のためのマイクロチップ)埋め込み。健康チェック。また親と別居させる。
- 12月 20日 ● ニホンザル 今年生まれの子供と母親に入墨。トローバン(個体識別のためのマイクロチップ)差し入れ。
- 12月 27日 ● ビーバー 雪や氷のかたまりを好んで食べる。室内に運んでいる。
- 1月 1日 ● ホンドフクロウ フクジロウ 距離30mで、ひもをつけて飛ばせる。反応がよく、笛を吹かなくても飛ぶ。
- 1月 9日 ● キリン AM10:30~PM3:00までパドックに出す。落ち着いて過ごしている。
- 1月 10日 ● フラミンゴ 午前中、水たまりで水浴びをする個体がいいたため、展示場プールに少し水を張る。数羽水浴びしていた。

楽しさいっぱい!

雪の動物園

今年も1月4日から3月1日の間の土日祝日に冬期開園「雪の動物園」を開催しました! 雪の動物園は、冬期の動物の生態を知っていただきたいと、平成2年からスタートした「冬の観察会」が始まりです。平成17年から「雪の動物園」となり、たくさんの皆様にご来園いただいています。今回は雪の動物園の際の動物の様子や、イベントについてお話しします。



銀世界でじゃれあう
アムールトラのこどもたち

冬が主役!の動物たち

動物園には、色々な種類の動物がいます。野生で生息している地域も、熱帯雨林から、極寒の地まで様々です。そのため、寒い時期にはそれぞれの過ごし方があります。

まずは、寒い地域に住んでいる動物達。アムールトラ、トナカイ、ユキヒョウなどが代表選手です。彼らにとっては、秋田の寒さなんてへっちゃら! むしろ元気になります。

特に去年の3月に生まれた、アムールトラの双子(アルルとミルル共にメス)は初めての雪におおはしゃぎ。展示場を走り回り、じゃれ回ります。

トナカイも冬は元気! 夏はあまりの暑さに、いつもバテバテだった姿はどこへやら。足取りも軽く、展示場の中を走り回ります。



気持ちよさそうに雪の上で寝ころぶアムールトラ



走り回るトナカイ



おばあちゃんだけど元気なユキヒョウ

寒さが苦手な動物たちは?



「ほかほかハウス」でくつろぐミーアキャット



仲良しカンガルー組。外の雪景色をながめています。

次に、決して寒さに強いわけではない動物たちは一体どのように過ごすのでしょうか?

たとえば、ゾウはアフリカの暑い地方に住んでいますが、気温や天候を見ながら、冬でも外の展示場に出る場合があります。ゾウのような大きい動物は、ある程度の寒暖の差にも適応できるのです。また、室内にずっといては、運動不足になってしまいます。野生では通常ありえない、アフリカゾウと雪の組み合わせは、なかなかご覧いただけない光景です。

また、寒さにかなり弱い動物たちは、室内で過ごすことが多くなります。

新世界サル舎やインコ舎では、サッシなどを使って寒さをシャットアウトしたうえ、さらにヒーターなどを使って室内の温度を上げます。写真左上のミーアキャットの場合は、冬期に「ほかほかハウス」を設置します。寒い日は、この中に入って、くつろいでいるようなユーモラスな姿で、お腹を温めている光景を見ることができます。写真左のカンガルーも室内で過ごします。現在、オス1頭、メス3頭を飼育していますが、仲良くゆったりと暮らしています。そのほのぼのとした姿に、見る側も癒されます。

雪の中のまんまタイム

開園中のイベントとして、動物たちのお食事風景をご覧いただく「まんまタイム」を実施しました。エサを食べている様子だけでなく、写真のように、レッサーパンダが立ってエサをねだる姿や、アシカが飼育員の指示に従って手にタッチする様子など、楽しい場面もご覧いただきました。

また、ホンドフクロウが飛ぶ姿をご覧いただける、フクロウのフライト・トレーニングも久々の再開となり、時間になるとたくさんのお客様に集まっていただきました。ホンドフクロウは、飛ぶ時は、獲物に気づかれないように羽音を立てません。スーっとまっすぐに目の前を滑空する姿は迫力があり、同時に美しいものです。



フクロウのフライトトレーニング



アシカが手にタッチ!



飛ぶ姿が美しいホンドフクロウ



エサをおねだり中のレッサーパンダ

あなたの夢は?

さらに上記のまんまタイムなどの他に、冬期のみ特別イベントとして、「平成21年わたしのゆめ」と題し、みなさまの夢を色紙の絵馬に描いてもらい、展示しました。大人も子供も、みんなそれぞれいろんな夢があります。一部をご紹介します。

- 元気に、友だちとなかよくたのしく、1年間がんばりたいです。
- 宝くじが当たりますように。
- 海外旅行と出世
- 家族をふやして動物園へみんなで来る!
- 子供が健康に育ちますように。
- ピアノが上手に弾けるようになりますように。
- ディズニーランドにいきたい。
- 今年こそ彼氏ができますように。
- 動物も人もすべてが健康でありますように。



皆様の夢をいっぱい並べました!

皆さんの夢が叶うことをお祈りいたします。

今年も、雪の動物園へのたくさんのご来園をありがとうございました!

今年ご来園出来なかった方は、来年も開催予定ですので、是非おこしください!

きになる! ミニQ&A クマの冬ごもり

大森山動物園ではツキノワグマを飼育しています。クマは冬に冬ごもりするイメージがありますが、実際にクマ達はどのようにしているのでしょうか? クマ担当の佐藤正飼育員に聞いてみました。

春が待ち遠しいな~



Q. 大森山動物園のクマは冬ごもりしますか?

A. 今年の冬は、冬ごもりはさせませんでした。

Q. 普通は冬ごもりするイメージがあるのですが、何故させていないのですか?

A. 冬ごもり中に、騒音などで頻りに目が覚めてしまうと、体力を消耗してしまうことがあるからです。

Q. 冬ごもりしない場合、どのように過ごしますか?

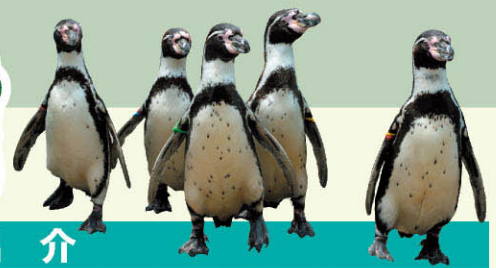
A. 夏場より食欲が少し落ち、眠そうにして室内で過ごしますが、でも、天気の良い日は、外の展示場に出ています。

Q. 逆に冬ごもりさせる場合は、どのようにするのですか?

A. 秋にいっぱいエサを食べさせ、寒くなって眠そうな様子になったら絶食させ、室内にワラを入れ、静かに冬ごもりさせます。

※クマの冬ごもり…ヤマネ、コウモリなどの外気温近くまで体温が下がる「冬眠」と区別して、「冬ごもり」と記載しています。

かたばた通信



終了イベント紹介

動物愛護 フェスティバル

9月21日

「みんなで考えよう!動物のきもち」をテーマに、動物愛護フェスティバル実行委員会主催で開催されました。長寿動物飼い主表彰式やストーンペインティング、アートバルーンなどの参加型イベント、犬との接し方を勉強する「犬のふれあい教室」など、盛りだくさんの内容でした。



表彰式の様子



ストーンペインティングの様子

秋の動物ふれあい フェスティバル

10月12日・13日

昨年も好評だった秋のイベントです。普段は行わない特別イベントを開催。ポニーのお散歩や猛獣一周ウルトラクイズ、猛獣舎裏側探検、吹き矢体験(動物に対して、吹き矢を使って投擲する処置の模擬体験です。)などのイベントをご用意しました。また、クイズで高得点だった方にはプレゼントをご用意しました。



ポニーのお散歩



猛獣舎の裏側探検



吹き矢体験中

さよなら感謝祭

11月30日

今年死亡した動物の霊を慰めるとともに、動物とお客様への感謝を込めて毎年開催する「さよなら感謝祭」。慰霊祭では、祭壇に花や供物をささげ、全員で黙祷しました。感謝祭では聖霊高校ハンドベルクワイアによる演奏や、ボランティアガイドによる動物のお話のほか、サンタ・トナカイとの撮影会や飼育員体験イベントなど、平成20年最後の日を飾るにふさわしい、盛りだくさんの一日となりました。



サンタさんと記念撮影



聖霊高校
ハンドベルクワイアの演奏



今年死亡した動物たちを弔う祭壇

お知らせ

通常開園は3月20日よりスタート!

平成21年の通常開園は、3月20日(金)(春分の日)からスタートです! 11月30日まで休まず開園します。
開園時間は9:00~16:30(入園は16:00まで)、
入園料は大人(高校生以上)500円、中学生以下無料。
3月には、改修中のコウノトリ舎も完成予定です。皆様お誘いあわせのうえ、ご来園ください!



僕たちに
また会いに
きてね!

21年度のイベントスケジュール

- ◎通常開園開始日..... 3月20日(金)
- ◎春の動物ふれあいフェスティバル.....6月7日(日)
- ◎写生大会..... 7月下旬予定
- ◎サマースクール(2回).....8月1日(土)、3日(月)
- ◎夜の動物園(4日間)..... 8月14日(金)~17(月)
- ◎秋の動物ふれあいフェスティバル(2日間) 10月11日(日)・12日(月)
- ◎さよなら感謝祭 11月29日(日)
- ◎通常開園終了日..... 11月30日(月)
- ◎雪の動物園..... 1月・2月の土日祝日を予定